リーディングDXスクール事業 【実践事例】

大仙市立豊成小学校（秋田県）【指定校】

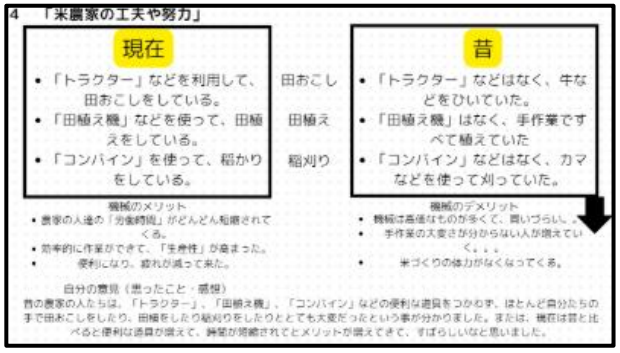
【取組内容】 インクルーシブ教育の視点を取り入れたICTの活用

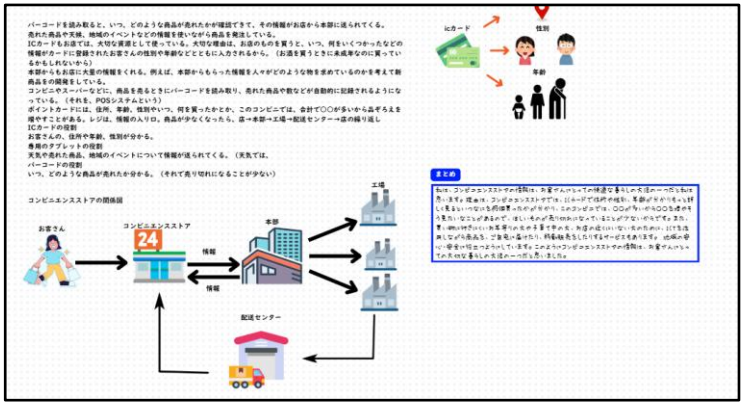
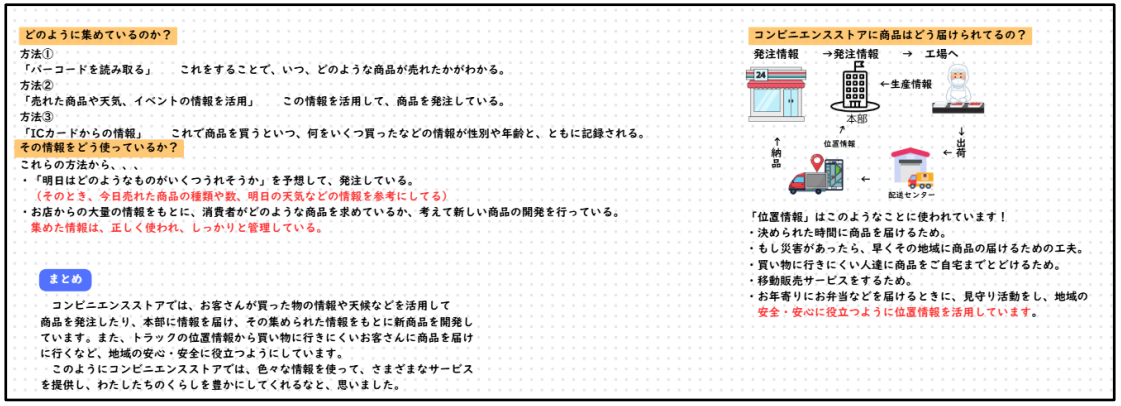
デジタルノートの活用

形が整った文字を書くことが苦手な児童は、特別支援学級にも普通学級にもいる。そこで特定の児童に教育的配慮として認めていたデジタルノートを全ての児童が使用してもよいことにして活用を試みた。特例として認めてしまうと、教室内に「ずるい」等の感情が生まれ、本当に必要とする児童が使いづらくなってしまうためである。これまでは紙のノートのみを使うことにしていたが、デジタルでも、紙のノートでも可とした。紙のノートでは難しかった図や写真を挿入したり、より構造的にまとめたりする児童も増えた。また、消しゴムで消すことが苦手であったり、消し跡が気になったりする児童にとっても、書き表すことのハードルが低くなった。さらに自分に合ったまとめ方を工夫することができたり、他者参照をして友達のまとめ方を参考にしたりするなどの効果もあった。

同様に、単元の終末に意見文を書く学習では、ねらいを「～についての意見文を書くことができる。」とし、アウトプットの方法は、ノート、原稿用紙、Wordといった選択肢を示して、児童が選択できるようにした。多くの児童は、Wordなどのデジタルを選んだが、経験を重ねると、アナログによるアウトプットの方が自分には合っていると感じた児童もいた。

書字が苦手な児童の中には、ディクテーション機能を活用したり、学習支援ソフトの音声入力機能を活用したりする児童もいた。書字の方法を、複数想定したことで、特別支援学級の児童のアウトプット意欲が以前に比べ高まり、自立活動での表現力の向上が見られた。



構造的なノートを工夫

イラストや図を入れて画一的ではないノート